

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 (25)

県営中山間地域総合整備事業西之表地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

# 寺之門遺跡

2013年3月

鹿児島県西之表市教育委員会



## 序 文

本報告書は、県営中山間地域総合整備事業西之表地区に伴い、西之表市教育委員会が発掘調査を実施した寺之門遺跡の記録です。

寺之門遺跡は、西之表市北部の国上地区寺之門に所在し、近隣には平成9年に発掘調査された同一周知内にある寺之門遺跡から縄文時代早期及び後期の多量の土器・石器が出土しており、また太田遺跡では古墳時代から中世に掛けての遺物が出土するなど貴重な古代の遺跡が数多く発見されています。

今回の発掘調査では、遺構は存在しなかったものの、縄文時代早期の土器の他にも石鏃などの石器類、軽石製品などが出土し、種子島の縄文時代早期文化を探る貴重な資料のひとつとなりました。

本報告書が学術的文献として活用されることはもとより、市民の文化財保護に対する意識高揚の一助となることを念ずる次第であります。

最後に、本報告書を刊行するにあたり、ご協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課および同県立埋蔵文化財センターをはじめ、国上地区の関係者、熊毛支庁農村整備課、ならびに発掘調査に従事された皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

西之表市教育委員会教育長 立 石 望

# 報告書抄録

ふりがな	てらのかど いせき							
書名	寺之門遺跡							
副書名	県営中山間地域総合整備事業西之表地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	25							
編集者名	和田正樹							
編集機関	西之表市教育委員会							
所在地	〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地							
発行年月日	2013年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寺之門遺跡	鹿児島県	462136	83	30度 48分 9秒	131度 2分 30秒	確認調査	122 m <sup>2</sup>	県営 中山間 地域総合 整備事業
	西之表市					20101018 ～ 20101112		
	国上					緊急調査	590 m <sup>2</sup>	
	寺之門					20110921 ～ 20111118		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
寺之門遺跡	散布地	縄文時代早期	なし	縄土石器 塞ノ神式  石器 石鏃 剥片類 磨石・敲石類 軽石製品 台石・石皿類				

## 例 言

1. 本書は県営中山間地域総合整備事業西之表地区に伴う寺之門遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、鹿児島県熊毛支庁農村整備課の委託を受け、西之表市教育委員会が実施した。
3. 本書に用いたレベル数値は、熊毛支庁農村整備課が作成した地形図に基づく海拔高である。
4. 本書の遺物番号は全て通し番号で、本文及び挿図・図版番号と一致する。
5. 発掘調査における測量・実測及び写真撮影は和田が行った。
6. 本書の執筆と編集は和田が行った。  
遺物の拓本・実測・トレースは西之表市埋蔵文化財整理作業員である河野賀奈子・荒木眞紀子・宇都美保子・和田が行った。
7. 写真図版の遺物撮影は、和田が行った。
8. 発掘調査及び整理作業に関して、鹿児島県教育長文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。
9. 出土遺物は西之表市教育委員会で保管し、展示・活用する。

# 目次

序文

報告書抄録

例言

第I章 調査の経過	1	第2節 層位	11
第1節 調査に至る経緯	1	第3節 遺構	15
第2節 調査の組織	1	第4節 遺物	15
第3節 調査の経過	2	(1)土器	15
第II章 遺跡の位置と環境	7	(2)石器類	15
第1節 遺跡の位置	7	第IV章 調査のまとめ	43
第2節 遺跡の環境	8		
第III章 発掘調査の概要	11		
第1節 調査の概要	11		

## 挿図目次

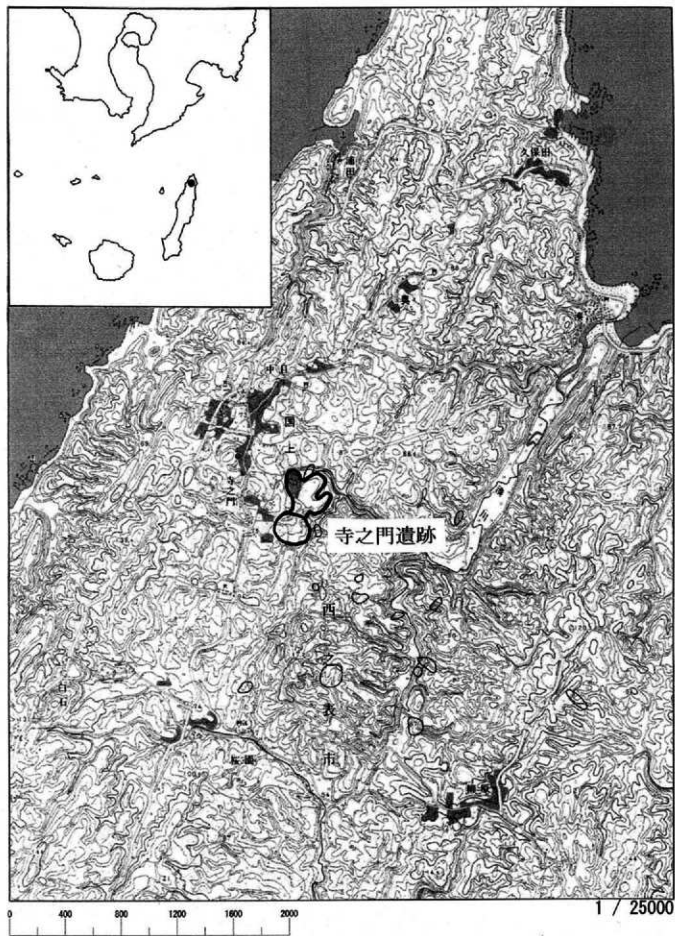
第1図 寺之門遺跡の位置		第16図 出土土器(7)	25
第2図 確認調査トレンチ配置図	4	第17図 出土土器(8)	26
第3図 トレンチ遺物出土状況	6	第18図 出土土器(9)	27
第4図 寺之門遺跡と周辺遺跡図	9	第19図 出土土器(10)	28
第5図 緊急発掘調査対象地	12	第20図 出土土器(11)	29
第6図 東側土層断面図	13	第21図 出土土器(12)	30
第7図 西側土層断面図	14	第22図 出土土器(13)	31
第8図 全遺物出土状況	17	第23図 出土土器(14)	32
第9図 土器出土状況	18	第24図 出土土器(15)	33
第10図 出土土器(1)	19	第25図 石器出土状況	34
第11図 出土土器(2)	20	第26図 出土石器(1)	35
第12図 出土土器(3)	21	第27図 出土石器(2)	36
第13図 出土土器(4)	22	第28図 出土石器(3)	37
第14図 出土土器(5)	23	第29図 出土土器(4)	38
第15図 出土土器(6)	24		

## 表 目 次

第1表	トレンチ調査状況	5	第4表	土器観察表(2)	40
第2表	寺之門遺跡周辺遺跡地名表	10	第5表	土器観察表(3)	41
第3表	土器観察表(1)	39	第6表	出土石器観察表	42

## 写真図版

図版 1	確認調査作業状況(1)	44	図版 11	出土土器(1)	54
図版 2	確認調査作業状況(2)	45	図版 12	出土土器(2)	55
図版 3	確認調査作業状況(3)・遺物出土状況	46	図版 13	出土土器(3)	56
図版 4	緊急発掘調査状況(1)	47	図版 14	出土土器(4)	57
図版 5	緊急発掘調査状況(2)・土層断面図	48	図版 15	出土土器(5)	58
図版 6	緊急発掘調査：遺物出土状況(1)	49	図版 16	出土土器(6)	59
図版 7	緊急発掘調査：遺物出土状況(2)	50	図版 17	出土土器(7)	60
図版 8	緊急発掘調査：遺物出土状況(3)	51	図版 18	出土土器(8)	61
図版 9	緊急発掘調査：遺物出土状況(4)	52	図版 19	出土石器(1)	62
図版 10	発掘調査作業員の皆さん	53	図版 20	出土石器(2)	63



第1図 寺之門遺跡の位置



## 第I章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

鹿児島県農政部（熊毛支庁農林水産部農村整備課）は、西之表市国上地内において中山間地域総合整備事業西之表地区を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下県文化財課）に照会した。

これを受けて、県文化財課が埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、事業区内に寺之門遺跡が所在することが判明した。

分布調査の結果をもとに熊毛支庁農林水産部農村整備課・県文化財課・西之表市教育委員会社会教育課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、埋蔵文化財と開発事業の調整を図るため、寺之門遺跡の埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。

寺之門遺跡の確認調査は、市教育委員会が調査主体となり、平成22年10月に実施した。確認調査の結果、工事対象地内の一部に遺物包含層が確認され、縄文時代早期相当の遺跡であることが判明した。

確認調査の結果をもとに、熊毛支庁農林水産部農村整備課・県文化財課・西之表市教育委員会再度遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事設計上、遺物包含層残存部分の現状保存は困難であるため工事着工前に緊急発掘調査（全面調査）を実施し、記録保存を図ることとなった。

緊急発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成23年9月21日から平成23年11月18日まで行った。整理・報告書作成作業は平成24年度に行った。

### 第2節 調査の組織

（寺之門遺跡確認調査）

事業主体者	鹿児島県農政部 熊毛支庁農林水産部農村整備課
発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教育長 有島正之
発掘調査企画	西之表市教育委員会 社会教育課 課長 奥村 学 係長 沖田純一郎
発掘調査担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主査 和田 正樹
発掘調査指導	鹿児島県教育庁文化財課
発掘調査作業員	中村義弘 山口和夫 荒牧文子 横山一代 高石尚美 佐々木三千代 永田房江 中野みゆき 中野郁代 牧内睦子 河野賀奈子

#### (寺之門遺跡緊急発掘調査)

事業主体者 鹿児島県農政部 熊毛支庁農林水産部農村整備課  
発掘調査主体者 西之表市教育委員会  
発掘調査責任者 西之表市教育委員会 教育長 立石 望  
発掘調査企画 西之表市教育委員会 社会教育課 課長 奥村 学  
係長 沖田純一郎  
発掘調査担当 西之表市教育委員会 社会教育課 主査 和田 正樹  
発掘調査作業員 落合奉美 中村義弘 山口和夫 荒牧文子 中村千恵子  
中河裕子 日高幸美 落合安子 小浜愛子 浜添ケサエ  
整理作業員 河野賀奈子

#### (整理・報告書作成)

事業主体者 鹿児島県農政部 熊毛支庁農林水産部農村整備課  
作成主体者 西之表市教育委員会  
作成責任者 西之表市教育委員会 教育長 立石 望  
作成企画者 西之表市教育委員会 社会教育課 課長 奥村 学  
係長 沖田純一郎  
作成担当 西之表市教育委員会 社会教育課 主査 和田 正樹  
整理作業員 荒木眞紀子 宇都美保子

### 第3節 調査の経過

#### (確認調査)

確認調査は平成22年10月18日から11月12日にかけて行った。遺跡エリア内の工事対象予定地に任意にトレンチを設定し、表土を重機で除去した後、人力で掘り下げを行いながら調査を実施した。

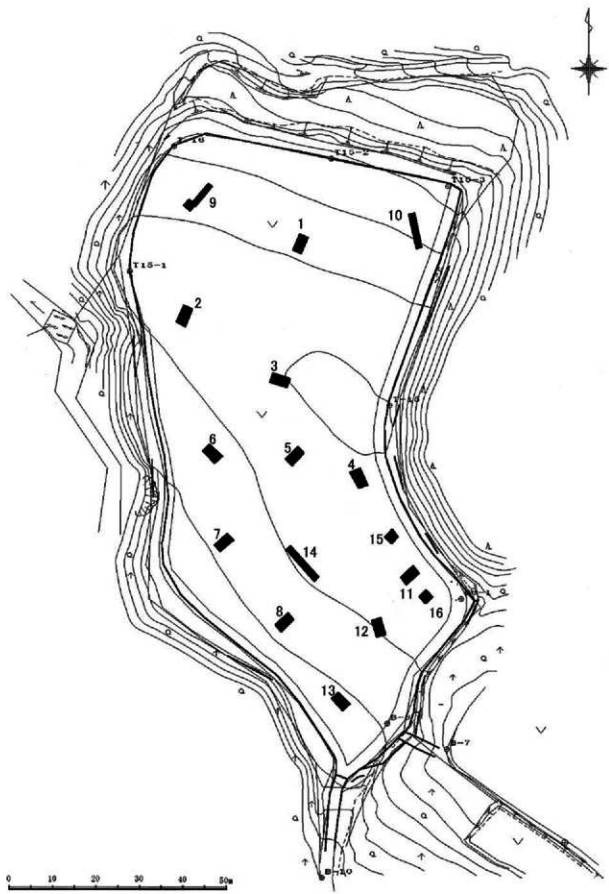
調査の結果、1・9・10・11・15・16 トレンチから遺物が出土した。とくに東側エリア11・15・16 トレンチについては、土層堆積も良好で、縄文早期の土器片や石器類が出土し、遺物包含層の残存が確認された。しかし、北側エリア1・9・10 トレンチについては攪乱・削平が著しく、土器片・石器類が出土しているが、すべて攪乱層からの出土であった。また残る西側・中央エリアのトレンチについても遺物の出土はなく、土層の堆積状況などから北側エリア1・9・10 トレンチと同様に攪乱・削平を受けており、北側エリア、西側・中央エリアともに遺物包含層残存しないと判断した。

これらの調査結果を踏まえ、11・15・16 トレンチを中心とするエリア約590㎡内に遺物包含層が残存するという結論に至った。設置したトレンチ数は16箇所である。

(緊急発掘調査)

緊急発掘調査は平成23年9月21日から11月18日まで行った。確認調査の結果から、工事対象地内の遺物包含層が残存している範囲（東側エリア）のみ発掘調査を行った。調査は表土・アカホヤ火山灰土までを重機で除去し、その後5m調査グリッドを設置し、人力で掘り下げながら、遺物及び遺構の検出を行った。

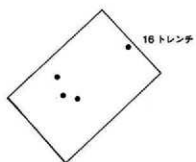
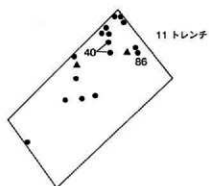
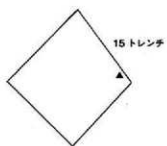
調査地東側区は特に表土下位にある造成土がかなり厚く堆積しているため、除去作業に時間を費やした。また、地形が傾斜地であることが判明し、場所によっては1m以上深く掘り下げなければ遺物包含層に到達せず、調査当初はかなりの労力を強いられた。調査面積は約590㎡である。



第2図 確認調査トレンチ配置図

第1表 トレンチ調査状況

No.	トレンチ名	大きさ (m)	深さ (cm)	最下層	遺物	遺構	地表からの 遺物出土 の深さ (cm)	遺物 出土層
1	1トレンチ	2×4	263	明黄色火山灰土	○	×	35	黒茶褐色土 (攪乱層)
2	2トレンチ	2×4	158	明茶褐色粘質土	×	×		
3	3トレンチ	2×4	138	明ページュ色ローム	×	×		
4	4トレンチ	2×4	73	岩盤層	×	×		
5	5トレンチ	2×4	26	岩盤層	×	×		
6	6トレンチ	2×4	195	暗茶褐色粘質土	×	×		
7	7トレンチ	2×4	172	明黄色火山灰土	×	×		
8	8トレンチ	2×4	160	明黄色火山灰土	×	×		
9	9トレンチ	1×6 1.5×1.5 (竪割)	124	岩盤層	○	×	30	黒茶褐色土 (攪乱層)
10	10トレンチ	1×8	188	岩盤層	○	×	31	黒茶褐色土 (攪乱層)
11	11トレンチ	2×4	189	岩盤層	○	×	88	ページュ色 ローム土
12	12トレンチ	2×4	200	明ページュ色ローム	×	×		
13	13トレンチ	2×4	238	岩盤層	×	×		
14	14トレンチ	1×8	180	岩盤層	×	×		
15	15トレンチ	2×2	99	暗茶褐色粘質土	○	×	65	ページュ色 ローム土
16	16トレンチ	2×3	64	明茶褐色粘質土	○	×	18	ページュ色 ローム土



- 土器
- ▲ 石器類



第3図 トレンチ遺物出土状況

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

種子島は鹿児島本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた、東南約40kmの海上にあり、南北約52kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高でも282.3mしかない低平な細長い島である。地形は丘陵地の山地、海岸段丘、河川周辺の沖積低地からなり、西方に約20km離れた九州最高峰の標高1935.5mもある宮之浦岳を有する屋久島とは対照的である。また、西海岸には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は段丘に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町の1市2町からなる。

種子島の遺跡についての述べると、約3万年前の旧石器時代の遺跡である横峯遺跡(南種子町)・立切遺跡(中種子町)や、同時期の国内最古級の落とし穴が多数発見された大津保畑遺跡(中種子町)などがあり、旧石器時代の様相を考えるうえで全国的に注目されている。また、旧石器時代終末期とされている細石刃核・細石刃が確認された遺跡は湊遺跡・大中峯遺跡・葉山遺跡(西之表市)・立切遺跡(中種子町)・銭亀遺跡(南種子町)などがある。湊・大中峯遺跡は表面採集資料ではあるが、大中峯遺跡では細石刃核10点、細石刃42点、剥片23点、碎片34点と多数の資料が採集されている。

縄文時代では、近年の調査で縄文時代草創期の良好な資料・遺構が相次いで発見されている。奥ノ仁田遺跡(西之表市)の調査で縄文時代草創期の遺跡が本土以南で初めて確認され、その後三角山遺跡(中種子町)・鬼ヶ野遺跡(西之表市)・横峯C・D遺跡(南種子町)での調査で陸帯体土器片や石器類、多数の遺構が発見され注目を集めている。また磨製の石槍が数十本出土し東日本との文化の交流を窺わせる園田遺跡(中種子町)などがある。その後の縄文時代早期では前平式・吉田式・下刺峯式・塞ノ神式・平栴式などが出土した遺跡の報告例が多数あり、また最近の調査でこれまであまり報告例が少なかった押型土器や手向山式土器の出土報告例も多数増えてきている。

前期の遺跡では轟式・曾畑式土器が出土する遺跡が多く、主な遺跡名を挙げると種子島で初めて発掘調査が行われた本城遺跡(西之表市)をはじめとした多くの遺跡が島内各地で確認されているが、中期の遺物の報告例は少ない。

後期の遺跡は指宿式・市来式などが出土する遺跡が島内各地で確認されており、納曾式土器の標識遺跡である納曾遺跡(西之表市)、竪穴住居や多数の土坑が検出された浅川牧遺跡(西之表市)、平成9年に発掘調査され、多数の土器片が出土した寺之門遺跡(西之表市)、特異な配石遺跡遺構が多数検出された藤平小田遺跡(南種子町)などがある。

晩期の遺跡では黒川式土器や人骨・貝製品が出土した一俣長崎鼻貝塚(南種子町)、出土物から縄文時代晩期から弥生時代にかけての生活址と思われる阿嶽洞穴(中種子町)、入佐式土器が出土した葉山遺跡(西之表市)などがある。これまでの発掘調査の成果から、種子島における縄文時代の文化は南九州本土の影響を色濃く受けているものと捉えている。

弥生時代は下刺峯遺跡・田之脇遺跡・上浅川遺跡・馬毛島椎ノ木遺跡(西之表市)や遺跡及び

約 1,200 点もの出土遺物が国の指定を受けた広田遺跡（南種子町）、鳥ノ峯遺跡（中種子町）などがあり、また中期頃の土器片が出土する遺跡も確認されているが、砂丘地の埋葬址が多いのが特徴的である。埋葬形態は覆石墓と呼ばれるもので、他の地域では類をみないこの地域一帯の極めて特殊な墓制と考えられている。

古墳時代に属すると思われる遺跡は上能野貝塚・嶽ノ中野 A・B 遺跡（西之表市）などが挙げられる。種子島において、いわゆる本土にみられる古墳と呼ばれるものはこれまでのところ確認されておらず、また弥生時代以降の遺跡は縄文時代の遺跡に比べ極端に少ないことから、未解明な点が多いのが現状である。

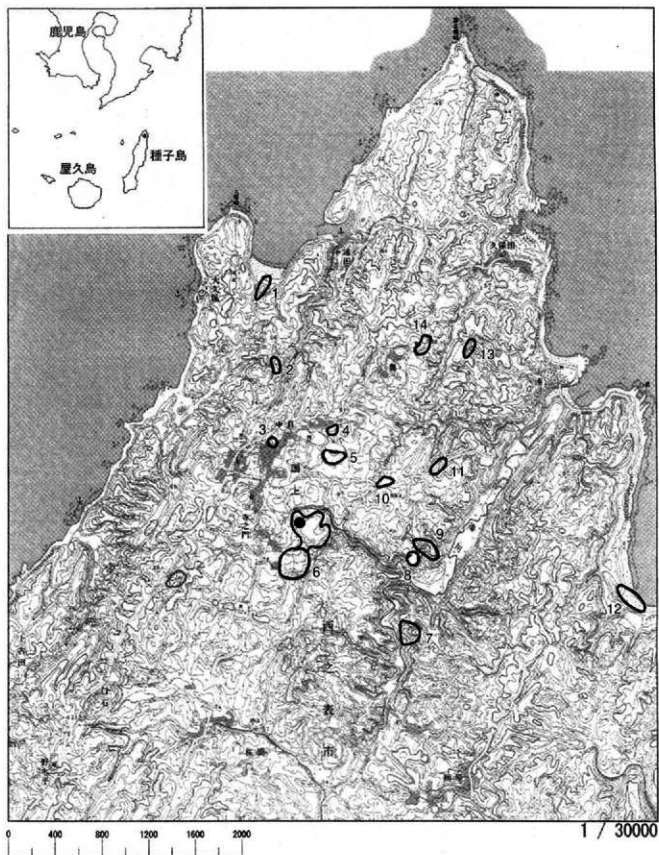
## 第 2 節 遺跡の環境

寺之門遺跡は西之表市の北部国上地区寺之門にあり、国上地区のほぼ中央部標高 76m に位置する。遺跡の周囲、西側から北側にかけて川（太田川）が流れており、丘陵の尾根筋にあたる畑地内に遺跡は形成されている。

遺跡の所在する国上地区は、種子島の最北端にあたり、旧石器時代から古代・中世にわたりバラエティーに富んだ遺跡が確認されているところである。なかでも古代・中世において非常に興味深い遺跡が多く、伝承も多く残っている。かつて島の北は「島上」とされていたが、多嶺国の頃（大宝年間）に「島上」が国であるということで「国上」となり、これが現在に至っているといわれている。他の地域では、北に位置することを意味する地名で「国上」の他に、「国頭」・「国北」などがあるが種子島では「国上」のみである。天平 13 年（741 年）聖武天皇の頃、全国的に国分寺が置かれ、種子島も多嶺国となり、同時に国分寺（島分寺）も置かれたが、その所在は未だ不明である。しかし、国上地区内には寺之門・花堂・大内屋敷など国分寺に由来するものと思われる地名等があり、所在地の有力な候補となっている。

寺之門遺跡周辺の遺跡について目を向けると、平成 9 年に農道整備事業に伴い調査がおこなわれた同一遺跡エリア内の寺之門遺跡からは、縄文時代早期の塞ノ神式土器、後期の指宿式・市来式土器や軽石製品が出土した。また、太田川の中流に所在する太田遺跡では古墳時代から中世にかけての遺物が出土している。なかでも 8 世紀後半の須恵器が出土したことや 9 世紀から 10 世紀末のものと思われる、高台に挟りのある土師器が数点出土している点が特筆される。この高台に挟りのある土師器は鹿児島県内では出土例がなく、県内で挟りのあるものは青磁・白磁が主であり 15 世紀に出現するとされている。太田遺跡から出土したこの挟りのある土師器は中国大陸の金属器・青銅器製品の模倣を試みたものとも考えられている。8 世紀の須恵器が多嶺国分寺に關係する資料であるかは他に類例もなく、今のところはっきりしないが、須恵器を使用した人々がこの国上の地に存在したことは確かである。また高台に挟りのある土師器は中国大陸の仏具の影響を受けている可能性もあり、9～10 世紀には中国大陸との何らかの交易があったことを窺わせる資料である。





第4図 寺之門遺跡と周辺遺跡図

第2表 寺之門遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	小浜貝塚	国上浦田	縄文前期・古墳・中世	平成8年・平成24年詳細分布調査
2	大中峯	国上浦田	旧石器	表面採集
3	稲村	国上中目	縄文	平成10年確認調査
4	稲庭	国上中目	古墳	平成10年確認調査
5	平庭A	国上中目	縄文・古墳	平成22年確認調査
6	寺之門	国上寺之門	縄文早期・後期・中世	平成9年・平成23年発掘調査
7	太田Ⅱ	国上寺之門	縄文・歴史	
8	太田Ⅲ	国上寺之門	歴史	
9	太田Ⅰ	国上寺之門	古墳・奈良・中世・歴史	平成14年詳細分布調査
10	平庭B	国上中目	縄文前期	平成10年発掘調査 平成22年確認調査
11	高峯	国上中目	縄文	平成10年確認調査
12	小浜	伊関柳原	中世	平成9年発掘調査
13	湊	国上湊	旧石器・縄文	表面採集
14	葉山	国上奥	旧石器・縄文早期・晩期	平成19年発掘調査

### 第三章 発掘調査の概要

#### 第1節 調査の概要

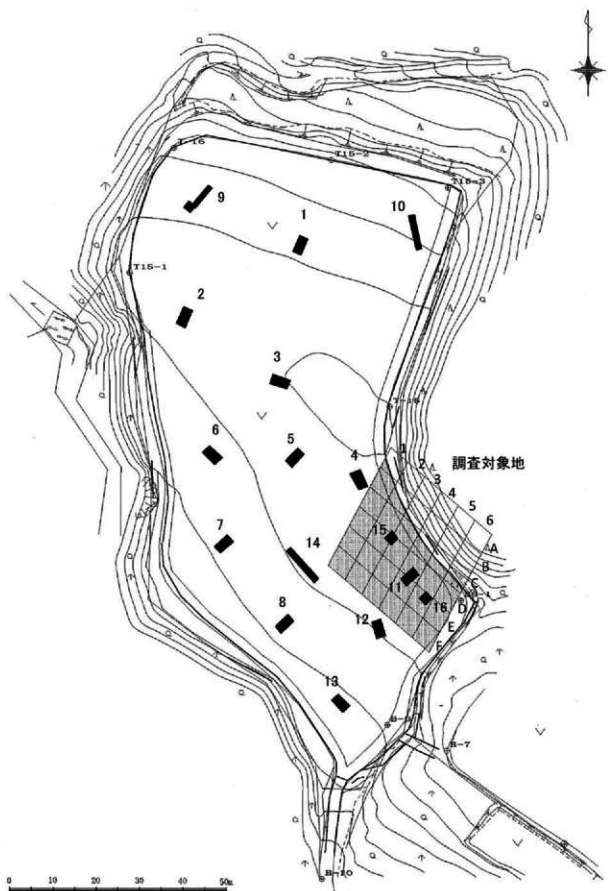
緊急発掘調査は確認調査の結果をもとに、工事対象地内で遺物包含層が残存している範囲のみを行った。調査は表土からアカホヤ火山灰層までを重機で除去し、その後5m調査グリッドを設置し東側から西側に向かってA区～F区とし、北側から南側に向かって1区～6区とした。

調査は人力で掘り下げながら遺物及び遺構の検出を行った。調査地東側区はとくに表土下位にある造成土がかなり厚く堆積しており、除去作業及び廃土処理にかなりの時間を費やした。確認調査の結果から、第V層より下位は無遺物層であることが確認されていたため、今回の調査の最下層を第V層としたが、下層確認のため一部西側区をVI層まで掘り下げた箇所もある。発掘調査面積は約590㎡である。

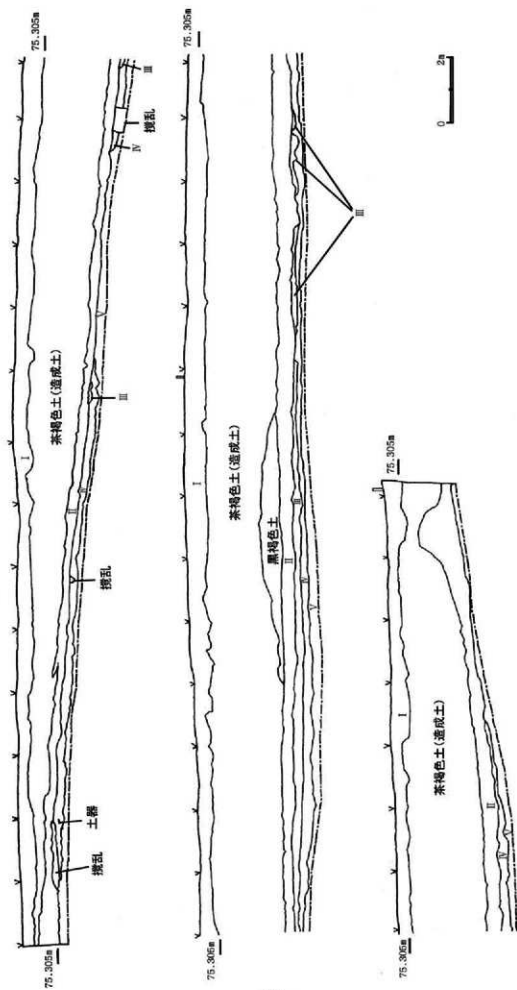
#### 第2節 層位

土層は場所によって、著しく攪乱を受けている箇所や、一部の層が欠落している部分も確認されたが、基本的には下記のとおりである。

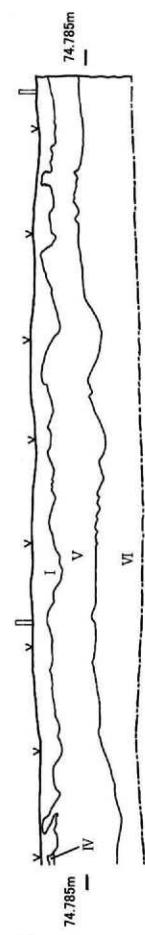
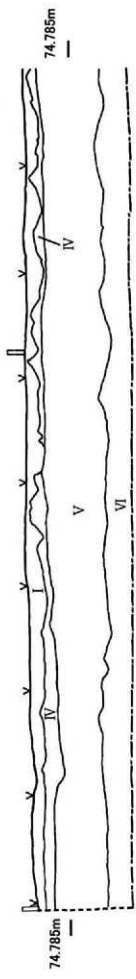
- |       |           |                              |
|-------|-----------|------------------------------|
| I層    | 表土        |                              |
| II層   | 黒茶褐色土     | 攪乱を受けている。                    |
| III層  | 橙色火山灰土    | アカホヤ火山灰層（約6,400年前の鬼界カルデラ噴出物） |
| IV層   | ベージュ色ローム土 | 遺物包含層（縄文時代早期）                |
| V層    | 暗茶褐色粘質土   | 硬質で粘質あり。場所によって黒色または白みが強くなる。  |
| VI層   | 明茶褐色粘質土   | 粘質が強い。                       |
| VII層  | 明黄色火山灰土   | AT火山灰層（始良カルデラの噴出物細粒）         |
| VIII層 | 明ベージュ色ローム | 粘質が非常に強く軟質である。               |
| IX層   | 乳白色ローム    | 非常に粘質が強い。                    |
| X層    | 岩盤層       |                              |



第5図 緊急発掘調査対象地



第6図 東側土層断面図



第7図 西側土層断面図

### 第3節 遺構

直径10 cm程度のピット1基検出したが、中の埋土を確認した結果から、樹根であることが判明した。

また、配石かと思われるものを調査地中央東側区から1基検出した。拳大程度の砂岩礫が4点、50 cmほど間隔をあけて点々と東側壁面に向かって直線上に散在していた。これらは地形に沿って、雑木等に覆われた東側傾斜地に続くものと思われる。礫は熱を受けた痕跡などは見られない。集石が崩壊したものと推測もできるが、一部攪乱を受けている部位からの出土でもあったため、遺構として明確な判断ができなかった。

### 第4節 遺物

土器片・石器類が調査区中央東側寄りを中心に出土した。出土層は全て第IV層である。遺物の時期区分は出土した層位及び、土器の文様から縄文時代早期のものと判断した。なお、番号を付けて取り上げた遺物は506点である。

#### (1) 土器

第IV層から400点近い土器が出土したが、なかには外面内面ともに整形が粗いうえに磨耗が激しく、文様が不明瞭で消滅しているものも多い。

出土した土器の大部分は、胴部が円筒形で頸部がラッパ状に「く」の字形に屈曲し、口縁部が大きく外反する独特の器形が中心をなしている。文様については、口縁部から頸部付近にかけて外面に貝殻を縦位に用いた刺突文・押引文を2条～3条等間隔に横位・山形に施し、胴部にはヘラ状の施文具を用いた凹線文の区画内に燃糸文もしくは貝殻条痕文を充填または組み合わせたものなど多彩である。

この他に、上述の土器様式とは異なった文様を持つ、初見の土器が出土している。口縁部は同様に外反するものの、文様は外面の口縁上位に竹管状の工具を用いて連続的に施文した土器が2点、円筒形のもので外面の口縁上位に貝殻の復縁部を横位に使用し、貝殻復縁文を条施しただけのものが1点確認されている。これらはバリエーションのひとつなのか、もしくは全く別のタイプのものなのか類例がないため判断できなかった。

#### (2) 石器類

石器は約100点出土し、共伴して出土した土器片から縄文時代早期のもので、剥片類が大部分を占めるなか、他数点の石鏃、磨石・敲石類、石皿・台石類が出土した。

#### 石鏃

打製石鏃が1点確認されており、石材は頁岩である。非常に小型で、刃部が欠損している。

#### 剥片類

剥片類は小片タイプで石材が頁岩のものと、中・大型タイプで石材が砂岩のものと 2 種類分けられる。小片タイプはいずれも磨耗激しいうえに非常にもろく、剥離痕及び調整痕ともに確認することが困難であるため、ここでの図化は割愛した。中・大型タイプがそれぞれ 1 点ずつ出土している。敲石として使用の際に偶発的に剥離したものととも考えられるが、使用痕が不明瞭なため剥片に分類した。

#### 磨石・敲石類

図化したのは 8 点である。円形・楕円形・長円形のものさまざまなものがあり、石材は全て砂岩である。いずれも敲打痕が周縁部に認められる。うち 6 点については、両面もしくは片面に敲打による凹みが顕著に見られる。

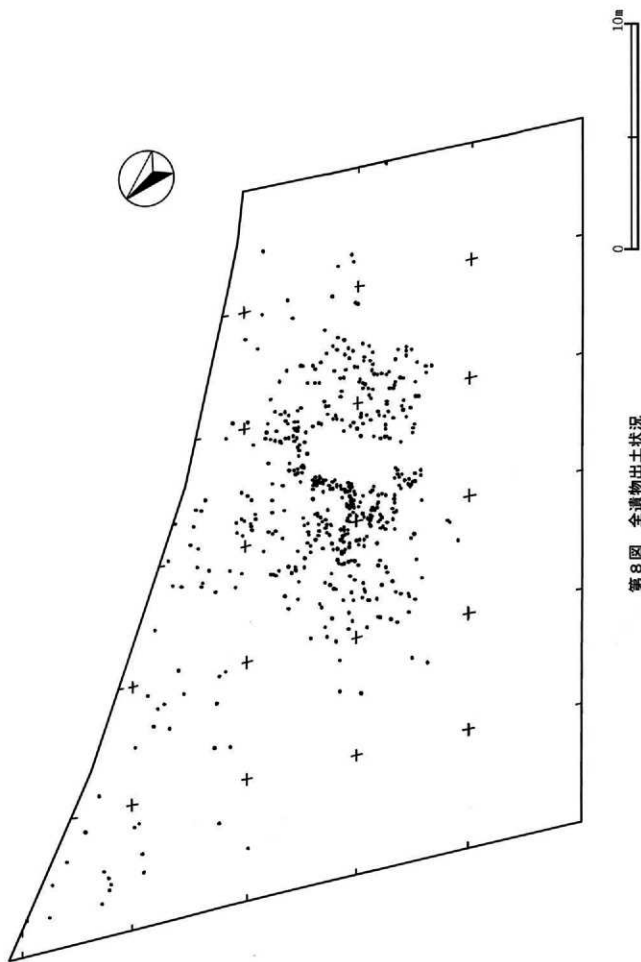
#### 軽石製品

図化したのは 2 点である。使用により一部片面が磨り減ったものや両面がほぼ鋭角に磨り減ったものが出土している。

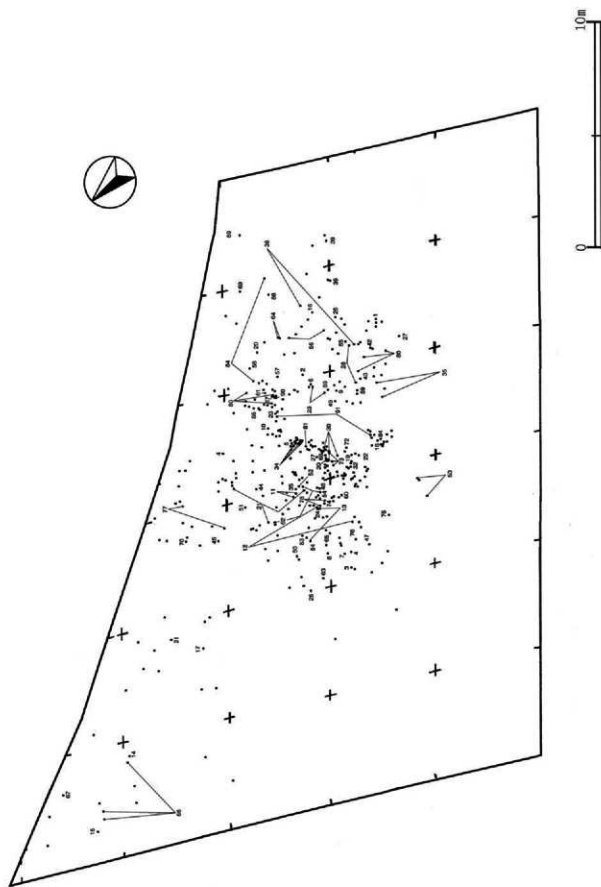
#### 石皿・台石類

使用痕が確認できた石皿・台石類は 2 点である。平滑面が観察される。石材は砂岩である。





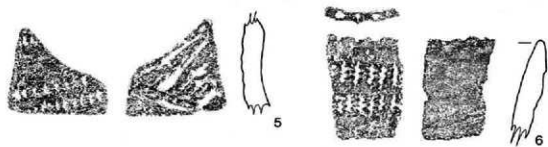
第8図 全遺物出土状況



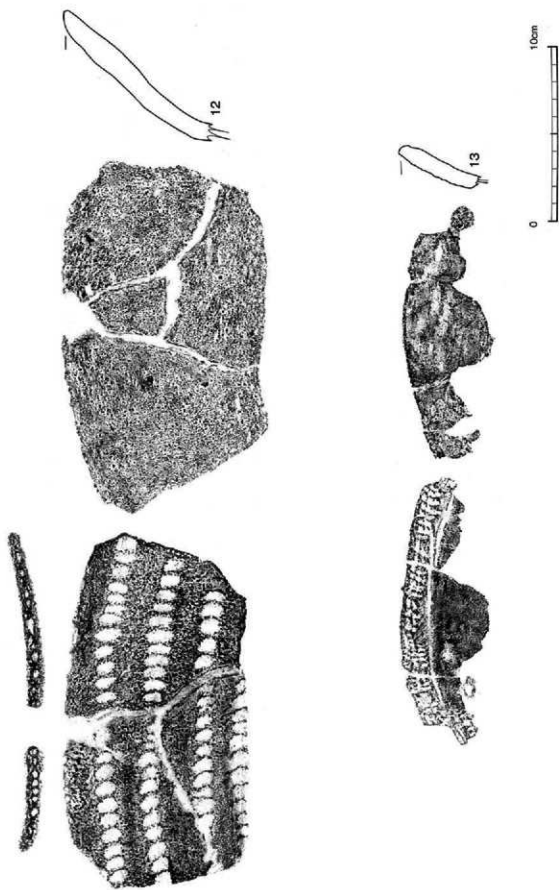
第9図 土器出土状況



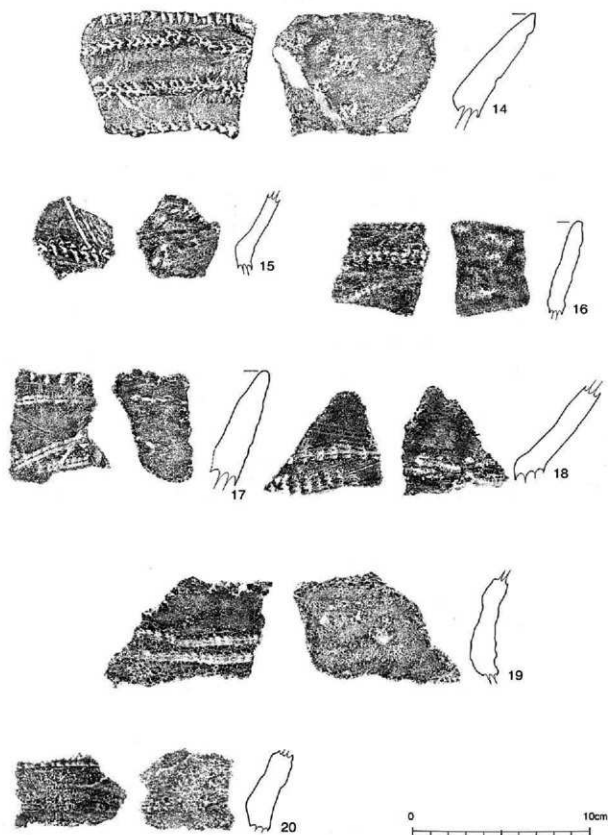
第10図 出土土器(1)



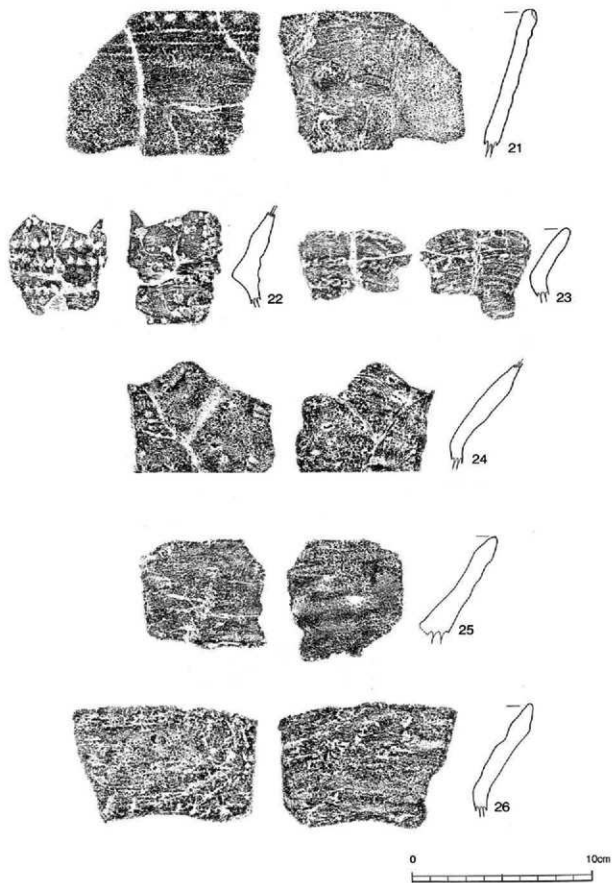
第 11 图 出土土器 (2)



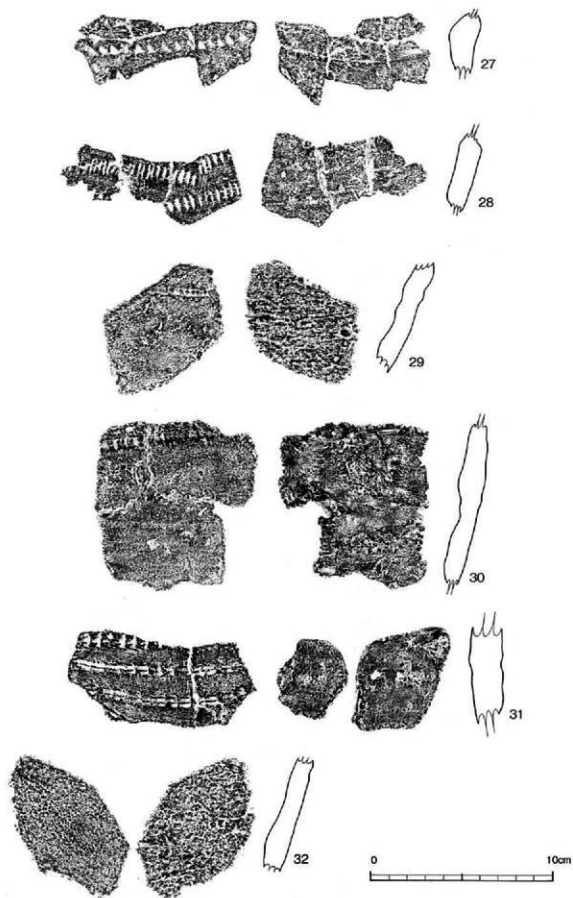
第12图 出土土器(3)



第13圖 出土土器(4)

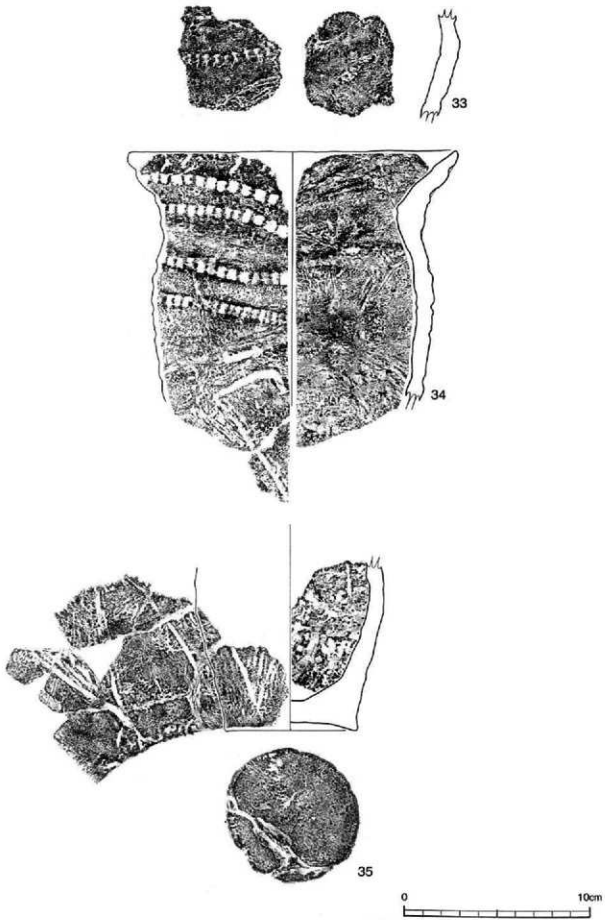


第 14 图 出土土器 (5)

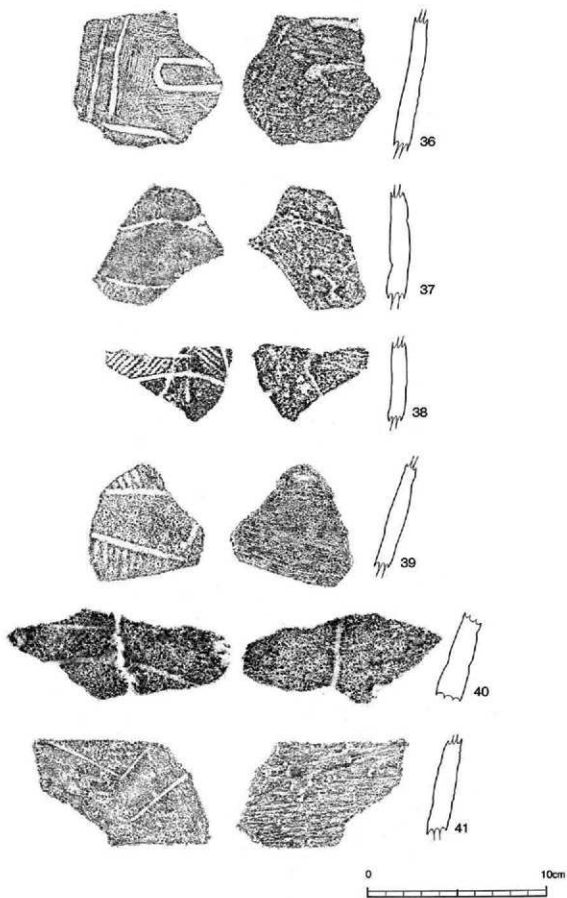


第15圖 出土土器 (6)

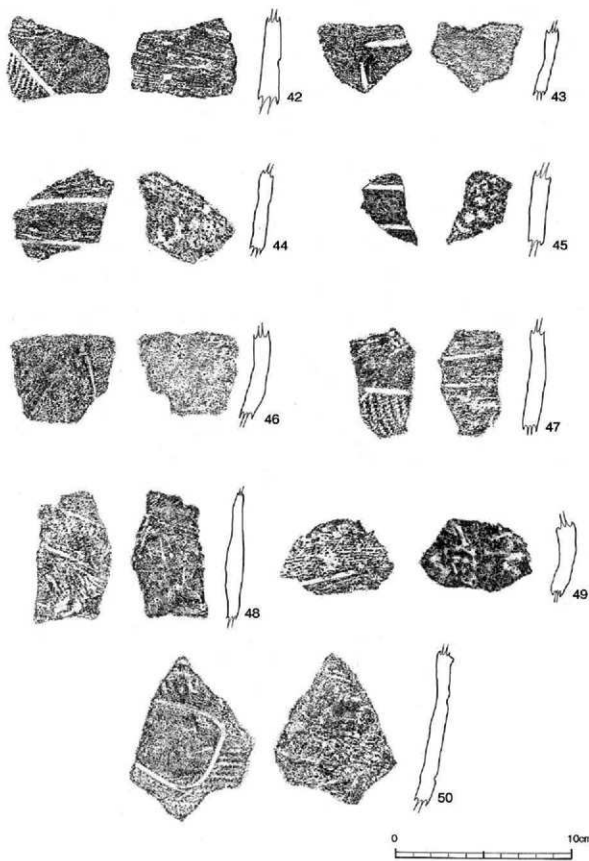




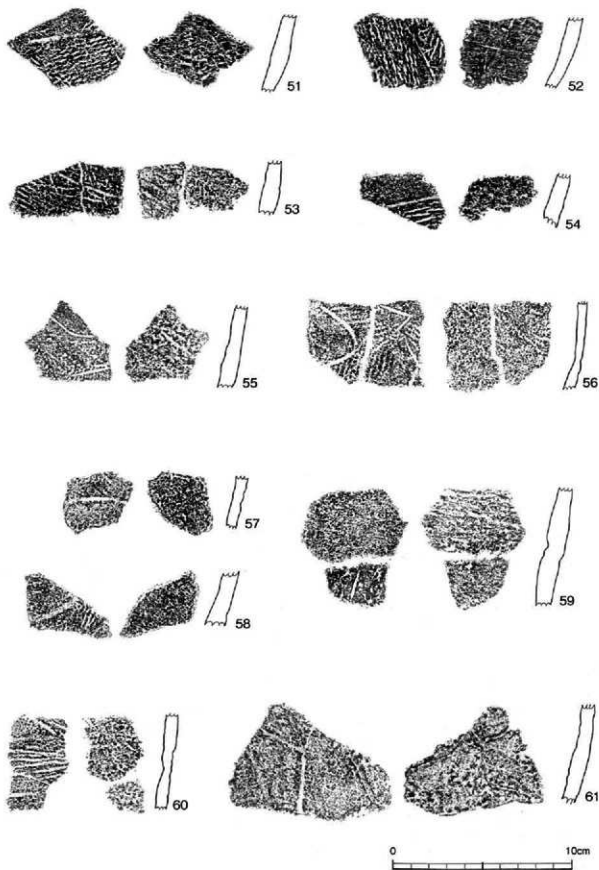
第16图 出土土器 (7)



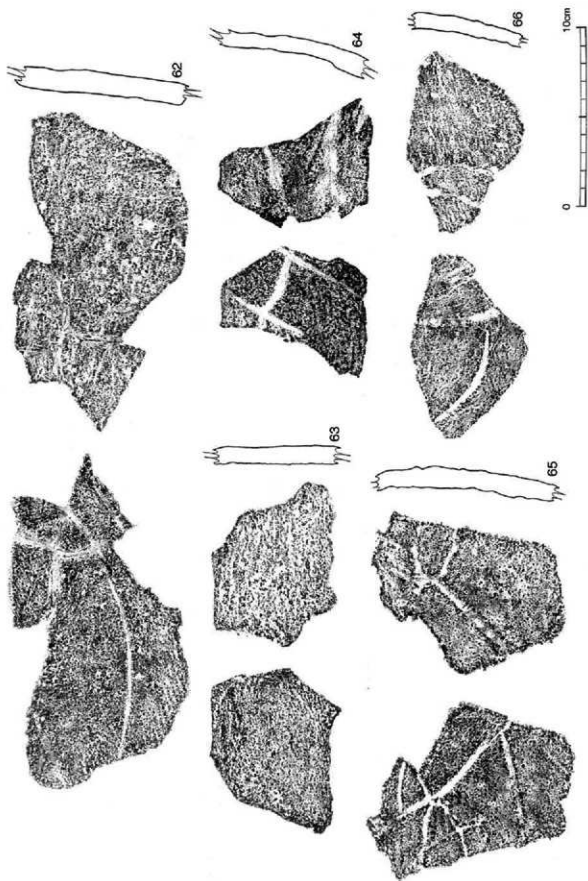
第17图 出土土器 (8)



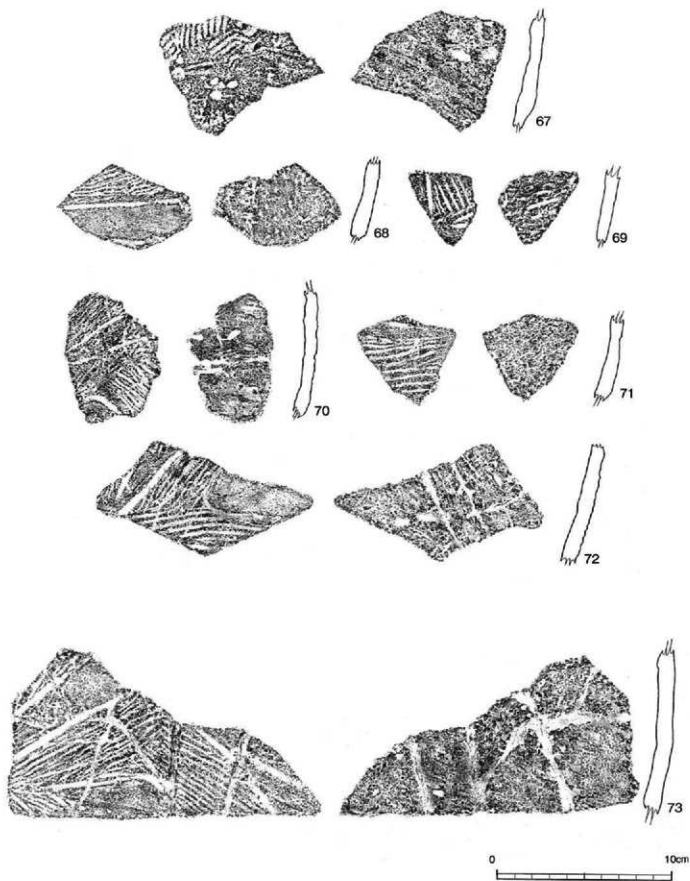
第18圖 出土土器(9)



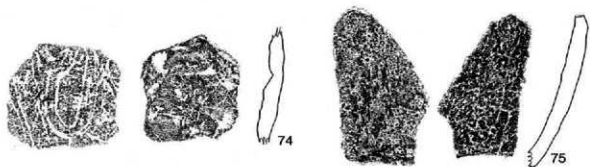
第19圖 出土土器(10)



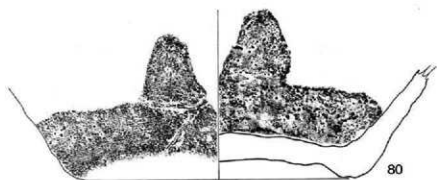
第20図 出土土器 (11)



第21圖 出土土器(12)

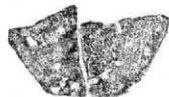
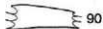
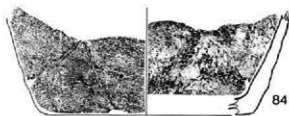
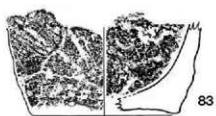


第 22 図 出土土器 (13)

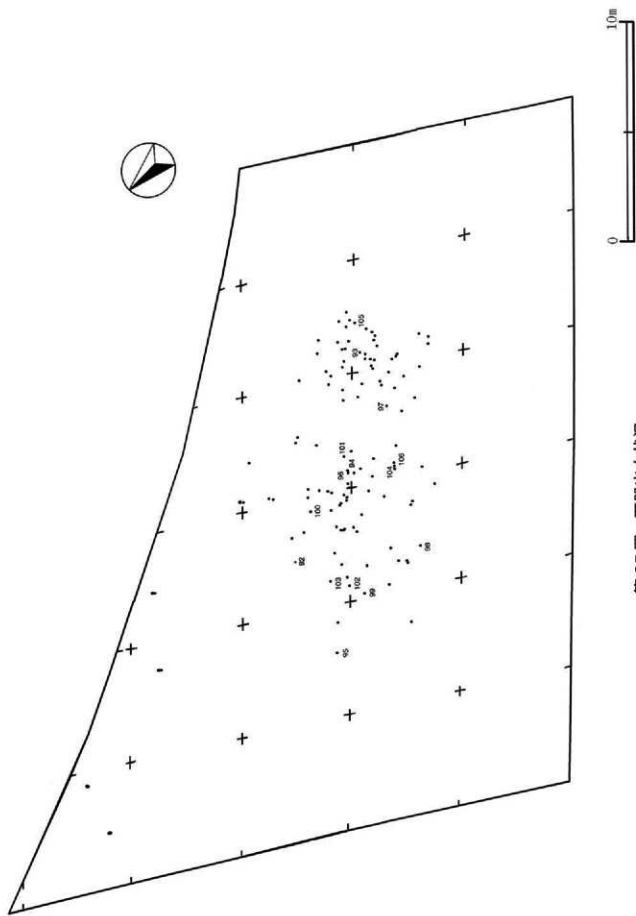


第 23 図 出土土器 (14)

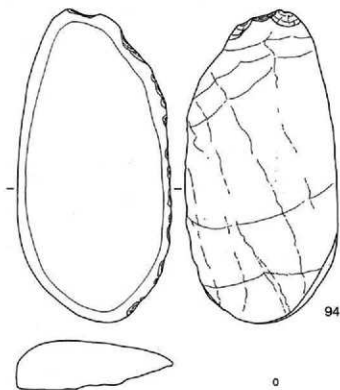
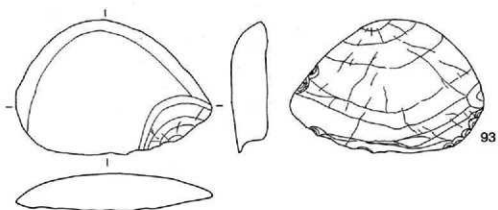




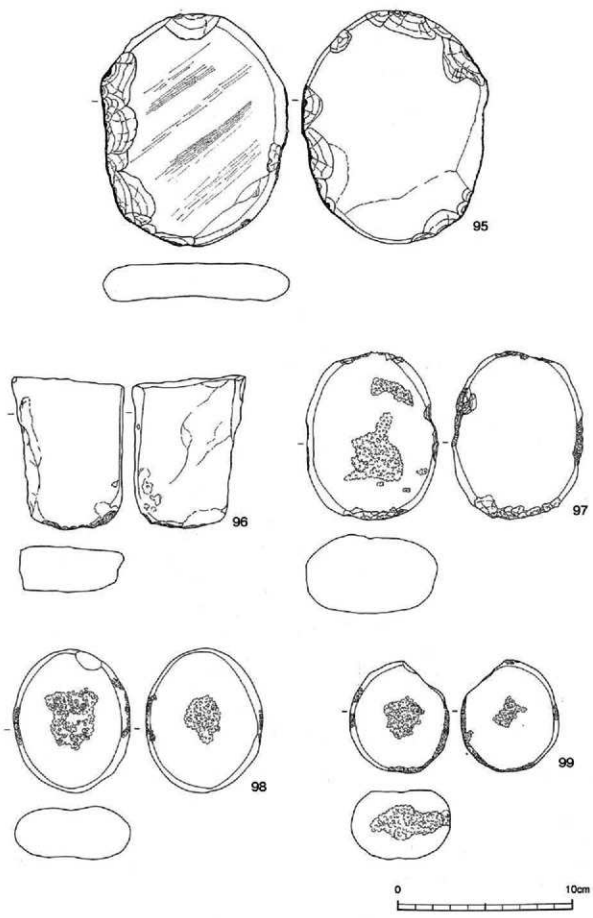
第24図 出土土器 (15)



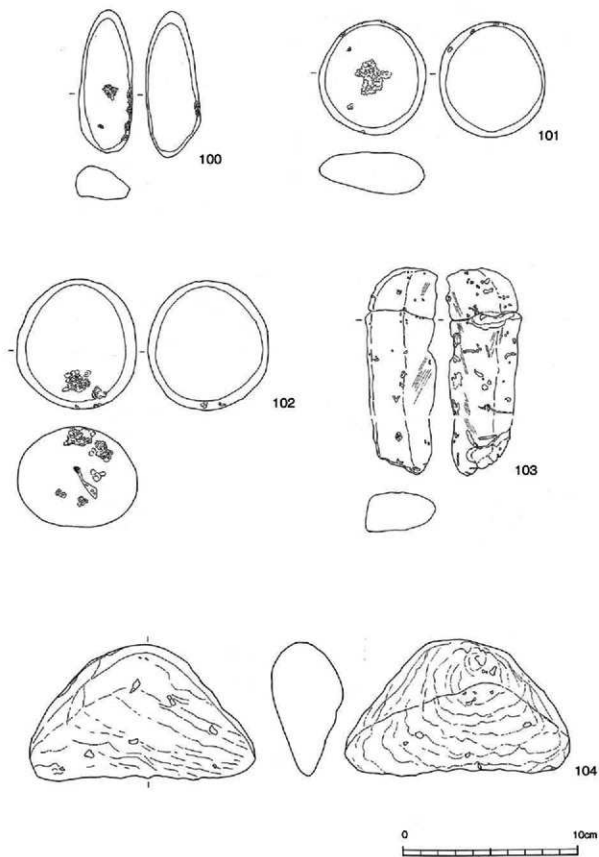
第25図 石器出土状況



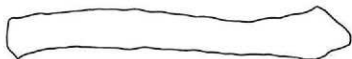
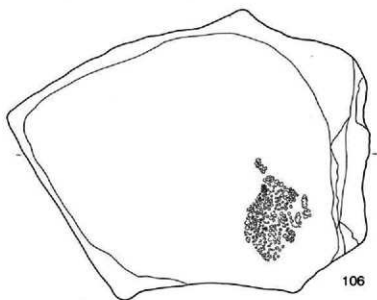
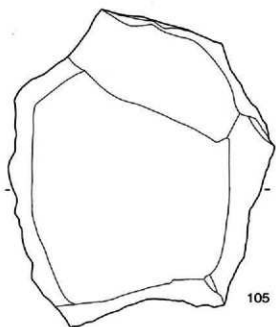
第 26 图 出土石器 (1)



第27图 出土石器(2)



第 28 图 出土石器 (3)



第29図 出土石器(2)

第3表 土器観察表(1)

押印番号	遺物番号	出土区	取上No.	部位	色調		出土層
					外面	内面	
10	1	E5	502	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
	2	D5	416	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
	3	E3	288・261	口縁	にぶい赤褐	にぶい橙	IV
	4	C4	80	口縁	にぶい赤褐	にぶい橙	IV
11	5	D4	405	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
	6	D4	237	口縁	にぶい赤褐	橙	IV
	7	E3	264	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
	8	E3	265	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
	9	E4	244	口縁	にぶい赤褐	にぶい赤褐	IV
	10	D4	201	口縁	にぶい赤褐	にぶい橙	IV
	11	D3	133・134	口縁	浅黄橙	にぶい橙	IV
12	12	D3・E3	159・278	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
	13	D3・E3	158・348・219・279	口縁	にぶい赤褐	にぶい橙	IV
13	14	C1・C3	44・100	口縁	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	15	B1	36	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
	16	D5	429	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
	17	C2	58	口縁	赤褐	にぶい赤褐	IV
	18	E4	334	口縁	赤褐	赤褐	IV
	19	E4	308	口縁	赤褐	暗赤褐	IV
	20	D5	442	口縁	赤褐	暗赤褐	IV
14	21	D3・D4	136・137・92	口縁	にぶい赤褐	暗赤褐	IV
	22	E4	329	口縁	浅黄橙	にぶい橙	IV
	23	D4	238・241	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
	24	D3	163	口縁	浅黄橙	浅黄橙	IV
	25	D3	182	口縁	にぶい赤褐	にぶい赤褐	IV
	26	E5	521	口縁	にぶい橙	にぶい橙	IV
15	27	E5	497・一括	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
	28	E4・E5	475・514	胴部	灰褐	にぶい褐	IV
	29	D4	374	胴部	明赤褐	赤褐	IV
	30	D4・E4	356・385・310	胴部	赤褐	暗赤褐	IV
	31	C2	57	胴部	赤褐	にぶい赤褐	IV
	32	E4	307	胴部	明赤褐	赤褐	IV
16	33	D4	218	胴部	明褐灰	明褐灰	IV

第4表 土器観察表(2)

押印番号	遺物番号	出土区	取上No.	部位	色調		出土層
					外面	内面	
16	34	D4	219・399・400・401・ 402・403・445	胴部	浅黄橙	浅黄橙	IV
	35	D3・E4	565・485・488・341	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
17	36	D5	435	胴部	赤褐	赤褐	IV
	37	D4	388	胴部	にぶい橙	浅黄橙	IV
	38	D5・E5	430・513	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	39	D6	535	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙	IV
	40	確認調査11T	12・13	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	41	E3	263	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
18	42	E5	507	胴部	明赤褐	赤褐	IV
	43	E4	474	胴部	明赤褐	にぶい赤褐	IV
	44	D4	112	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	45	C3	61	胴部	橙	にぶい橙	IV
	46	E4	300	胴部	にぶい橙	明褐灰	IV
	47	E3	269	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
	48	D3	147	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	49	E4	247	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	50	D3	185	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
19	51	D3	104	胴部	浅黄橙	明褐灰	IV
	52	D4	363	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
	53	E3	248・250	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	54	D3	151	胴部	橙	にぶい赤褐	IV
	55	E5	511	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	56	D5	426・454	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	57	D5	450	胴部	暗赤褐	赤褐	IV
	58	D5	443	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
	59	E4	478	胴部	橙	にぶい橙	IV
	60	E3	282	胴部	にぶい橙	暗赤褐	IV
	61	D4	227	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
20	62	D3・D4	135・150・124・362	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
	63	D3	181	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	64	D5	452・453	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
	65	D3	173	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	66	B1	37・98・99	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	IV



第5表 土器観察表(3)

押図番号	遺物番号	出土区	取上No.	部位	色調		出土層
					外面	内面	
21	67	B1	35	胴部	明赤褐	にぶい赤褐	IV
	68	D4	377	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	69	D5	438	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	IV
	70	C3	66	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	IV
	71	D3	138	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	72	E4	318	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	73	D4	375・554・313	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
22	74	D3	155	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	75	E3	255	胴部	にぶい橙	にぶい橙	IV
	76	E3	268	胴部	橙	にぶい赤褐	IV
	77	C3・C4	60・70・189	胴部	明赤褐	暗赤褐	IV
	78	D3	154・156	胴部	橙	にぶい赤褐	IV
	79	E3・E4	299・541	胴部	橙	暗赤褐	IV
23	80	E4・E5・D4	473・509・537・195・219・222・413	底部	橙	にぶい橙	IV
	81	D4	394	底部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	82	D4	354	底部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
24	83	D3	178	底部	にぶい橙	にぶい赤褐	IV
	84	D3・D5・D6・E4	345・444・532・333	底部	明赤褐	暗赤褐	IV
	85	D4	197	底部	にぶい橙	にぶい橙	IV
	86	確認調査11T	28	底部	にぶい橙	にぶい橙	IV
	87	D4	223	底部	にぶい橙	淡橙	IV
	88	D5	437	底部	にぶい赤褐	にぶい橙	IV
	89	D4・E4・D3・E3	242・157・一括	底部	橙	にぶい赤褐	IV
	90	確認調査11T	11	底部	明赤褐	にぶい橙	IV
	91	D4・E4	212・330	底部	明赤褐	にぶい橙	IV

第6表 石器観察表

採回番号	遺物番号	器種	取上No.	出土区	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	出土層
26	92	石鏃	121	D3	1.4	1.3	0.4	1	頁岩	IV
	93	剥片	527	E5	6.6	9.6	7.8	138	砂岩	IV
	94	剥片	373	D4	15.3	7.9	2.4	397	砂岩	IV
27	95	敲石	93	D2	13.3	10.7	2.2	481	砂岩	IV
	96	敲石	550	D4	8.7	6.4	2.6	240	砂岩	IV
	97	磨石・敲石	482	E4	9.6	7.5	4.3	470	砂岩	IV
	98	磨石・敲石	256	E3	8.2	6.7	3.0	236	砂岩	IV
	99	磨石・敲石	262	E3	6.4	5.7	4.0	201	砂岩	IV
28	100	磨石・敲石	350	D3	8.2	3.1	2.4	86	砂岩	IV
	101	磨石・敲石	553	D4	6.5	6.1	2.2	124	砂岩	IV
	102	磨石・敲石	180	D3	7.4	6.9	5.7	375	砂岩	IV
	103	軽石製品	183	D3	11.8	3.9	2.2	19	軽石	IV
	104	軽石製品	322	E4	7.7	12.9	4.0	77	軽石	IV
29	105	台石・石皿	462	D5	37.2	31.3	9.5	13000	砂岩	IV
	106	台石・石皿	578	E4	33.6	42.4	6.0	9000	砂岩	IV

## 第IV章 調査のまとめ

調査の結果、遺構はピット及び配石と思われるものがそれぞれ1基検出されたが、樹根跡や擾乱を受けていることから遺構としての判断ができなかった。

出土遺物のほとんどは土器片で、すべて第IV層で出土した。小片や摩耗が激しいものが多い。主体となる土器は縄文時代早期の塞ノ神式土器である。外面に燃糸文や貝殻条痕文を施しており、種子島内では各地で確認されている。

出土した土器はさらに3分類できる。34・35のように口縁部の外面を貝殻腹縁による刺突文で飾り、胴部には沈線文の区画内に燃糸文を施したものが大多数を占めるが、これらは塞ノ神A b式の範疇に入るものと思われる。29～31は外面に沈線文による区画と施することなく、貝殻腹縁による刺突連続文を施している。これは塞ノ神B d式の範疇に入るものと思われる。67～73は外面に沈線文の区画内に貝殻条痕が幾条にも施されている点から塞ノ神B c式相当に位置づけられる。

また、塞ノ神様式の様相を窺わせるが、施文具の種類や用途の違いにより、これまでの主文様式とは異なる土器も出土している。21は外面の口唇部に貝殻圧痕を連続的に施し、正面観はやや小波状を呈するものである。その直下には等間隔に3条貝殻腹縁を横位に使用した刺突連続文を施し、(胴部は無文である。)頸部はラッパ状に「く」の字形に屈曲せず、胴部から口縁部までそのまま円筒形を呈している。22・23は外面の口縁上位に竹管状の工具を用いて連続的に施されており、頸部は外反する。75は2条の連点文である。これらは、それぞれ1点もしくは2点と出土数が少ないうえに小片のものもあるため、判別し難い。今後の類例を踏まえてさらに検討していかなければならない。

出土した石器のうちほとんどが剥片類であった。中でも頁岩製の剥片は磨耗が激しく、脆いうえに崩れやすいのが特徴である。そのためほとんどが原型を留めておらず、剥離痕及び調整痕を確認することさえ困難なため、図化作業を断念した。この剥片類と同じ石材を利用した石鏃が出土しているが1点のみであるため、関連性を特定することはできなかった。

石器はほかに磨石・蔽石類、石皿・台石類、軽石製品が出土している。磨石・蔽石類はとくに蔽石として使用されているものが多い。軽石製品については用途不明だが、片面もしくは両面が磨り減っているものが出土している。

今回の調査で、調査区D4・E4を中心に10m四方範囲内に縄文時代早期の遺物が集中して出土した。住居址などの生活遺構が検出されなかったことにより、遺跡の全体像を明らかにすることは容易ではないが、調査地の南東部に隣接する畑地は一段小高い丘陵を形成しており、この丘陵の尾根筋にあたる調査区内に遺物が何らかの要因で流れ込んだものと考えられる。

小片のものや遺存状態不良の出土遺物が大多数を占めるなか、バリエーションに富んだ塞ノ神式土器が発見され、これまで種子島内で発掘調査報告例がなかったもの、また少なかったものが発見された点においてはたいへん意義深く、興味深い資料を呈した遺跡である。



写真図版





1トレンチ



2トレンチ



3トレンチ



4トレンチ



5トレンチ



6トレンチ

確認調査作業状況(1)

図版2



7トレンチ



8トレンチ



9トレンチ



10トレンチ



11トレンチ



12トレンチ

確認調査作業状況(2)





13トレンチ



14トレンチ



15トレンチ



16トレンチ



土器出土状況 (11トレンチ)



土器出土状況 (16トレンチ)

確認調査作業状況(3)・遺物出土状況

図版4



緊急発掘調査状況(1)



東側



西側

緊急発掘調査状況(2)・土層断面

図版6



緊急発掘調査：遺物出土状況（1）



緊急発掘調査：遺物出土状況（2）

図版8



緊急発掘調査：遺物出土状況（3）



緊急発掘調査：遺物出土状況（4）



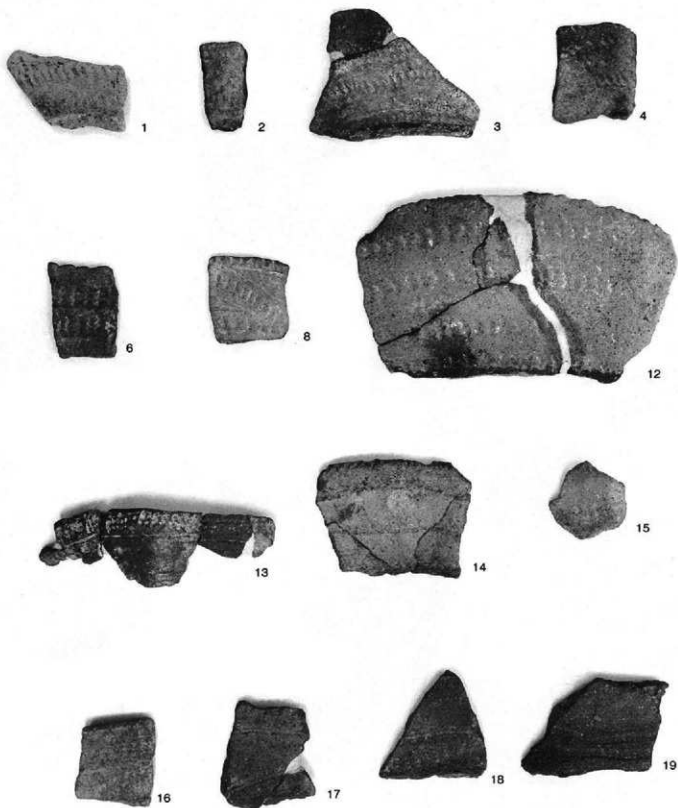
確認調査



緊急発掘調査

発掘調査作業員の皆さん





出土土器 (1)



出土土器 (2)



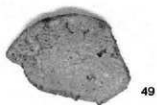
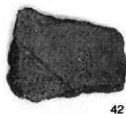
34



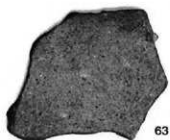
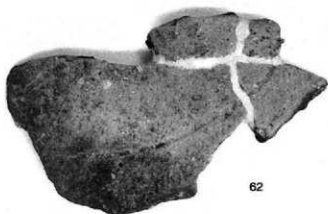
35

出土土器 (3)

图版 14

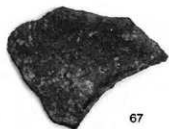


出土土器 (4)



出土土器 (5)

圖版 16



67



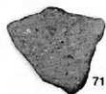
68



69



70



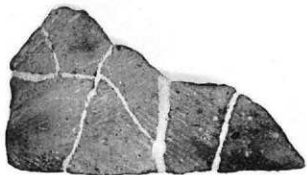
71



72



74



73



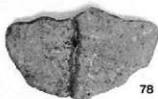
75



76



77



78



79

出土土器 (6)



出土土器 (7)



88



90



89



84



91

出土土器 (8)





93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104

出土石器 (1)



出土石器 (2)

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 (25)

## 寺之門遺跡

発行日 平成25年3月

発 行 鹿児島県西之表市教育委員会

〒891 - 3193 鹿児島県西之表市西之表 7612 番地

TEL 0997 - 22 - 1111

印 刷 (有)種子島新生社印刷

〒891 - 3101 鹿児島県西之表市西之表 167636-1

TEL 0997 - 22 - 0476

